Meisei University

永遠(とわ)に若く、そして美しく

牛村　圭*

快楽のテクスト

日頃漠然と感じていることをうまくまとめた表現に出会うと、快哉を叫ぶといえば大げさだが、しごく納得してしまうことがある。言い得て妙、とはこのことか、と思う。ところで、古今東西の文学に目を通していると、読み手であるこちらをいつしか捉えて放さないというテクストに出会うことがある。プロットの展開の巧みさに引きつけられることもある。その一方、読んでいて実に心地よい、と思わせるテクストもある。読書が文字通り仕事で、好き嫌い関係なく読まねばならない文藝批評家とは違い、市井の読書人には、好きな文学書を求めて気の赴くままに次々と読めるという特権がある。そんな贅沢なひととき、心地よさをも感じさせるテクストに出会うと、何やらとても幸せな経験をしたような気分になる。これは、読書の喜び、というより快楽とさえ呼んでよい経験と感じる。

かつてロラン・バルトは「テクストの快楽」と言った。フランス語原典はもとより、参考までに英訳、そしてもちろん日本語訳に目を通してみても、わかったようでいて、その実よくはわからない、そんな気にいつもなる。しかし、バルトが書名として流布させたplaisir du texte「テクストの快楽」とは、実にうまい表現だと思う。これこそ、冒頭に記した「日頃漠然と感じていることをうまくまとめた表現」の典型例であろう。

「テクストの快楽」は、市井の読書人だけが有する特権ではもちろんない。文学研究を専攻にかかげる学徒もまた、「テクストの快楽」を自らの研究対象に発見することもある。心地よささえ感じさせる研究対象をうまく論じることができたとき、その研究成果はさぞかし読んでいて楽しい、充実したものとなるだろうと期待できる。もちろん、対象作品の「限界」を論じたり、流行の「文学理論」を当てはめたりして、文学研究を行なうこともできよう。しかし、そういった「成果」は個人にとって業績の一つとはなろうが、読み手を引きつける魅力が往々にして欠けていることも事実である。忌憚なく言えば、研究のための研究、と分類できる代物であろう。これに対し、豊かな文学研究は、その対象への共感から始まっているものがほとんどではないかと思う。そして、対象への共感を研究者に呼び起こさせるのに一役買っているのが、畢竟「テクストの快楽」なのだろう。

本稿は、バルトの「テクストの快楽」の表現に出会った折の新鮮な思いを振り返りつつ、名作のつまみ食いとの誹りは甘受して、快楽のテクストを実際に読むことを目指すささやかな試み(1)である。

永遠に若く、そして美しく　牛村　圭＊一般教育　助教授　近現代比較日本文明論

NII-Electronic Library Service

Meisei University

永遠に若い伝説の妖精

ジェラール・ドゥ・ネルヴァル（一八〇八―五五）といっても、この十九世紀フランスの作家・詩人を知る人は多くはない。同じロマン派の作家であり、ネルヴァルの友人でもあったヴィクトル・ユーゴーが、大作『レ・ミゼラブル』を始めとする多くの小説で今なお日本で読まれているのとは、好個の対照である。しかしながら、ゲーテの『ファウスト』のフランス語訳の訳者としても知られるこのネルヴァルは、日本では、二度にわたって全集が刊行されてきた[2]という事実からわかるように、決して多数派ではないにしても、愛読者が着実に存在してきた作家・詩人でもある。また、日本への紹介もことのほか早く行われており、アーサー・シモンズの岩野泡鳴訳『表象派の文学運動』（大正二年）にその名が登場するのが、わが国への本格的紹介の嚆矢と言われている[3]。

さて、このネルヴァルに『シルヴィ』という珠玉の小品がある。これは作家四十五歳の折の小説である。快楽のテクストの一つとして、まずこの短編を取り上げてみたい。その前に、『シルヴィ』の魅力を語るという視点が、決して唐突ではないことを証するために、目利きの読み手の意見を引いておく。フランス文学者であり、また文藝批評家として多くの書に通じた人の見解なら、耳を傾ける価値はあるというものである。

わがささやかな読書歴をふりかえっても、本当に快楽の名に値するテクストには、それほど数多く出会った覚えがない。ただ文章を読んでさえいれば、それだけで心ここにないような楽しさが湧きあがり、酔うような快感が身体をつつみこんでくれるようなテクストが、そう手軽に見つけだせるはずはない。『失われた時を求めて』のある部分と並んで、『シルヴィ』は、私にそういう快楽を運んでくれる数少いフランス語のテクストの一つである[4]。

「わがささやかな読書歴」と卑下して書くこの人は、実は膨大な読書量を誇るフランス文学者菅野昭正である。文藝批評家として東西の文学に通じた視点から、『シルヴィ』の魅力を「ただ文章を読んでさえいれば、それだけで心ここにないような楽しさが湧きあがり、酔うような快感が身体をつつみこんでくれるようなテクスト」と語る。本稿にとり頼もしい援軍である。以下、「酔うような快感」を味読することとしたい。

『シルヴィ』の第六章「オチス」は、パリに暮らす主人公の「ぼく」がある夜、幼少時代をおくったヴァロアの地に思いを馳せ、思い立ってパリから馬車を駆る場面から始まる。その道すがら、少年の日に幼なじみの土地の娘シルヴィと、オチスに暮らすシルヴィの年老いたおばを訪ねた日のことを回想する。シルヴィと「ぼく」は、野原で摘んだ苺と真っ赤なジキタリスの花束を抱えて、おばのもとを訪れた。その家は小さな田舎家で、ホップや野葡萄のからまる格子垣をめぐらしてあった。おばは夫の死後、村の人が耕してくれるわずかな土地をたよりに、一人暮らしをしていた。

「このひと、わたしの恋人よ！（C'est mon amoureux!）」とシルヴィに紹介され、初対面の挨拶を済ませると、おばは二人のために朝食にベーコンエッグを調理してあげると言いだした。その間、おばが昔作ったレースを見たいと言って、シルヴィは二階へと上る。「ぼく」もあとに続いた。そこには、田舎風のベッドの枕辺に二枚の肖像画が掛けられていた。一枚はコンデ家の狩場番人の制服を身に着けた青年、そしても

NII-Electronic Library Service

Meisei University

う一枚は、その若い妻を描いたものだった。

Ainsi que sa jeune épouse, qu'on voyait dans un autre médaillon, attrayante, maligne, élancée dans son corsage ouvert à échelle de rubans, agaçant de sa mine retroussée un oiseau posé sur son doigt. C'était pourtant la même bonne vieille qui cuisinait en ce moment, courbée sur le feu de l'âtre. Cela me fit penser aux fées des Funambules qui cachent, sous leur masque ridé, un visage attrayant, qu'elles révèlent au dénoûment, lorsque apparaît le temple de l'Amour et son soleil tournant qui rayonne de feux magiques. ((O bonne tante, m'écriai-je, que vous étiez jolie !...Et moi donc ?)) dit Sylvie.(5)

狩場番人の若い妻も、もう一つの額縁の肖像画のなかにうかがえた。この女性は、魅力的でいたずらっぽく、胸元をはしご状にしたリボンで開いたブラウスを着てすらりと身を伸ばし、顔をあおむけて、指にとまらせた鳥をからかっていた。けれどもこの年若い女こそ、今暖炉の火に腰をかがめて調理している、あの人のいいおばあさんその人だった。それでぼくは、フュナンビュール座の妖精のことを思いだした。皺だらけの仮面の下に魅力的な顔を隠し、芝居の大詰め、「愛」の神の宮と、魔法の炎を放射して廻る太陽とが姿を表す段になって、仮面を脱ぐあの妖精たち。ぼくは大きな声で言った、「ああ素敵なおばさん、なんてきれいだったんだろう!」「それじゃ、わたしはどうかしら?」とシルヴィ。

肖像画に描かれたこの陽気な若い娘こそ、今しがた初対面の挨拶を済ませたばかりのあの老女その人だった。目の前のお年寄りがかつて華やいだ若い娘だったと信じることは、それが人の世の常であり、ゆるぎなき事実ではあっても、こちらの年端がいかなければいかないほど、むずかしい。幼い孫にとっては、おばあちゃんは、自分が生まれる前からずっといつでもおばあちゃん、なのである。おばあちゃんもかつては子どもだったと実感できるためには、それ相応の年齢になるのを待たなければならない。シルヴィのおばは、「ぼく」の金髪を愛でて、「いつまでもこうじゃないけど、それまでには、まだまだ時間があるわよ」、と言った。まだまだ時間がある（Vous avez du temps devant vous.）と言われたまだ十代の少年にとり、果してどれだけこの摂理が実感できただろうか。初めて出会った人のよいおばあさん、そして二階へ足を運ぶとその彼女の若き日の姿が「ぼく」を迎える。一歩一歩階段をのぼる行為が、実は時間軸を遡っているような印象を読み手に与える。

数十年もの歳月が、一気に逆行したかのような場面である。そんな場面に期せずして直面することとなった「ぼく」は、人の世の現実から離れフュナンビュール座の妖精という空想の世界へと思いを巡らす。「皺だらけの仮面の下に魅力的な顔を隠し」ている妖精たち。ここでは仮面は「老い」の象徴として用いられている。そして一瞬にして脱ぐその仮面との対比により、仮面の下の魅力的な顔は、一層強く効果的に「若さ」を見る者に訴えかける。幼なじみのシルヴィに連れて来られたおばの家、一緒にのぼったその二階で「ぼく」を迎えてくれた肖像画は、まるで階下でいま自分のために朝食を作ってくれているあのおばあさんが、フュナンビュール座の妖精のように一気に仮面を脱いだかのような錯覚を「ぼく」に覚えさせたのだった。

NII-Electronic Library Service

Meisei University

失われた時間を愛惜する

おばの家の二階の引き出しには、いつも鍵がかかっている引き出しが一つあった。「鍵はみんな開いているよ」と彼女は言うが、故意か偶然か、その引き出しは開かなかった。しかしシルヴィはこっそりおばの腰から鍵を抜き取り、引き出しを開けることに成功する。

Elle y avait trouvé une grande robe en taffetas flambé, qui criait du froissement de ses plis. ((Je veux essayer si cela m'ira, dit-elle. Ah! Je vais avoir l'air d'une vieille fée)) ((La fée des légends éternellement jeune!...)) dis-je en moi-même...Et déjà Sylvie avait dégrafé sa robe d'indienne et la laissait tomber a ses pieds. La robe étoffée de la vieille tante s'ajusta parfaitement sur la taille mince de Sylvie.....(6)

引き出しの中に、シルヴィは炎のようなタフタ織りの晴れ着を見つけた。晴れ着のひだは、かさかさと軽い音を立てた。シルヴィは言った、「似合うかどうか着てみたいわ。きっとわたし、妖精のおばあさんのように見えてよ」「永遠に若い伝説の妖精さ！」とぼくはひとりごちた。シルヴィはもう自分のインド更紗の服のホックを外し、それを足もとにすべり落していた。年老いたおばの華やかな服は、シルヴィのほっそりしたからだにぴったり合った。

こうして開かずの引き出しを初めて開けたシルヴィは、見つけたタフタ織りの晴れ着をさっそく身に着けてみる。若き日のおばに負けず劣らずシルヴィも「魅力的でいたずらっぽ」い娘である。その晴れ着は、脱げて置いてきてしまった靴がシンデレラの足にぴったり合ったかのごとく、若いシルヴィの細身のからだにぴったり（parfaitement）合った。肖像画からうかがうことしかかなわない年老いたおばの娘時代の美しさを、おばの血を引くシルヴィが、他ならぬそのおばがかつて身に着けたのと同じ晴れ着という小道具を通して、再現したのである。肖像画では「静」であったおばの娘盛りの美しさが、シルヴィという生きた娘によって、「動」の美を獲得するにいたった。それはまた、「永遠に若い伝説の妖精」の出現でもあった。

『シルヴィ』を愛でる仏文学者菅野昭正は、前掲のエッセイのなかでさらにこう書いている。

過去を追慕する甘美な感情というものは、誰のなかにもひとしく頒かたれている。しかしその感情をそれにふさわしい文章に溶かしこむ能力となると、これは誰にもひとしく頒かたれているわけではない。ネルヴァルはその能力を最高度にめぐまれていた。讃えられるべきであるのは、過去を愛惜する感情の深さや豊かさそのものではなく、温色の光につつまれたその感情の微妙な波動を刻みつけた言語が、自由自在に駆使されていることである。(7)

「過去を追慕する甘美な感情というものは、誰のなかにもひとしく頒かたれている。しかしその感情をそれにふさわしい文章に溶かしこむ能力となると、これは誰にもひとしく頒かたれているわけではない。ネルヴァルはその能力を最高度にめぐまれていた」という記述を前にすると、

NII-Electronic Library Service

Meisei University

これこそ『シルヴィ』を極上の短編にしている鍵だ、と直ちに首肯したくなる。そして、「温色の光につつまれたその感情の微妙な波動を刻みつけた言語」といった批評家らしい言葉も、実際に『シルヴィ』を読めば、なるほどと納得できる表現にたちまちなる。

ここまで見てきた場面だけでも十分に「テクストの快楽」は堪能できる。だが作者ネルヴァルはさらに、肖像画に描かれた今は亡きおばの夫の「静」の若さを、「動」の若さに転じようと試みる。すなわち、狩場番人夫妻を描いた一対の肖像画が、命を吹き込まれて動き出したかのように、シルヴィに若き日のおばの再現をさせるにとどまらず、「ぼく」にもかつてのおばの夫の役回りを演じさせるのだった。

La voix de Sylvie me rappela bientôt. ((Habillez-vous vite!)) dit-elle, et entièrement vêtue elle-même, elle me montra les habits de noces de garde-chasse réunis sur la commode. En un instant, je me transformai en marié de l'autre siècle. Sylvie m'attendait sur l'escalier, et nous descendîmes tous deux en nous tenant par la main. La tante poussa un cri en se retournant: ((O mes enfants!)) dit-elle, et elle se mit à pleurer, puis sourit à travers ses larmes. C'était l'image de sa jeunesse...cruelle et charmante apparition![8]

シルヴィの声がすぐにぼくを呼んだ。「急いであなたも着替えてちょうだい！」そういうシルヴィはもうすっかり身支度を終え、たんすの上にまとめてある狩場番人の婚礼衣装を、ぼくに指し示した。たちまちぼくは一八世紀の花婿に変身した。シルヴィは階段のところで待っていてくれ、二人で手をとって降りていった。おばさんは振り返ると大きな声を上げた、「まあ、あんたたちったら！」こう言うとおばさんは涙をこぼし始め、そして涙ごしに微笑んだ。それは彼女の若き日の面かげ、残酷な魅力たっぷりの幻だった！

「静」と「動」、「若さ」と「老い」との対照を、この上なく巧みに用いて描かれた件りである。もっとも、こんな「冒険」は、まだ髪の色が金髪のままの世代の少年少女にしかかなわないのだろう。いまや若さが過去のものとなった者には、「残酷な魅力たっぷりの幻」に他ならないのであったから。「老い」と対照させての「若さ」の強調という手法は極めて効果的ながらも、年老いた身には厳しい現実の確認を迫るような場面でもある。なのに、なぜ読み手は目をそむけたくなるような辛い思いをせずに、ここに「テクストの快楽」を味わうことができるのだろうか。この問いに対しては、先に引いた批評家の解釈をいま一度参考にしたい。

取りかえしようもなく失われているのを承知の上で、なおかつ過去を取りかえそうと焦慮するか、あるいは二度と帰らないものとして、いわば距離を置いて失われた時間を愛惜するか。過去の追慕に動かされているという限りでは、その二つの態度は、帰するところ同じ根につながっているとも言えるかもしれない。が、あちら側の不可能を追って激流を渡るか、それともこちら側にじっとたたずんでいるか――要するに失われたもののなかにどこまでのめりこむか、という違いは厳然と存在している。はじめて読んだ『シルヴィー』のネルヴァルが気がねなく附きあえそうな気がしたのは、要するに、彼はそこではま

NII-Electronic Library Service

Meisei University

だ、こちら側にとどまっているように見えたからだったと思う。(9)

「二度と帰らないものとして、いわば距離を置いて失われた時間を愛惜する」とは、シルヴィのおばの姿勢そのものと言えよう。安心して、落ちついてこのテクストを読める。それはひとえに、このおばという人物を設定し、その発言・挙措を練り上げて提示した作者ネルヴァルのお手並みのおかげなのである。「若さ」の象徴であるかのようなシルヴィばかりか、彼女のおばの「こちら側にじっとたたずんでいる」姿が、「テクストの快楽」を増幅する。

人生という季節の経過は一回限りのものである。春夏秋冬が規則的に繰り返されるのとは違って、反復も後戻りもない、そしてかなわない。若さは一回限りのものだからこそ尊く、輝くのだろうし、一方、かつてその若さを享受したゆえに、豊かな「老い」は、若さで目映く輝く世代を寛容に包み込めるのだろう。そんなことをふと思わせさえするおばの姿を描く『シルヴィ』の一節である。一過性のものゆえ、若さは素晴らしい。「永遠に若い」のは「伝説の妖精」だけだ、という事実を読み手に改めて思わせるこの場面を味わっていると、ついあの和歌が口をついて出てくる――散ればこそいとど桜はめでたけれ浮き世になにか久しかるべき。そろそろ、もう一つの快楽のテクストへ移ることとしよう。

浮き世になにか久しかるべき

これは『伊勢物語』八二段にある和歌である。該当箇所を以下に引く。

……いま狩する交野の渚の家、その院の桜ことにおもしろし。その木のもとにおりゐて、枝を折りてかざしにさして、上中下みな歌よみけり。馬頭なりける人のよめる。

世の中に絶えて桜のなかりせば春の心はのどけからまし

となむよみたりける。

又人の歌、

散ればこそいとど桜はめでたけれ浮き世になにか久しかるべき(10)

とて、その木のもとは立ちてかへるに、日ぐれになりぬ……

『伊勢物語』の多くの段と同様、これも在原業平にまつわる話である。業平とおぼしき男が、お仕えする惟喬親王一行と狩りに出向き、狩りはほどほどにして桜のもと皆で宴を催す。業平が、この世に桜などなければいつ咲くかとやきもきしたり散るのを惜しんだりせずに過せるから、落ち着いて春の日々をおくれるだろうに、と詠んだのに対する返歌が、この「散ればこそいとど桜はめでたけれ浮き世になにか久しかるべき」の歌なのである。

盛者必衰、諸行無常といえば、あの壮大な叙事詩『平家物語』の専売特許のように思われがちだが、文学史上「歌物語」の嚆矢と呼ばれるだけあって、『伊勢物語』のこの歌もまた、盛者必衰のことわりを三十一文字で見事に表している。「浮き世になにか久しかるべき」に込められた気持ちは、『シルヴィ』のオチスの段に描かれた、「永遠の若さ」は「伝説の妖精」にのみ可能なことであり自然の摂理はそれを許さない、という文脈に符合する。

専門家の言を待つまでもなく、『伊勢物語』は個々の段をそれ自体として味読できるばかりか、初冠した若い貴族が登場する第一段に始まり、病を得て遠からぬ死期を認識した年配の男を描く最終段まで続く、一人

NII-Electronic Library Service

Meisei University

の貴族の男の一代記とも読める。もっとも、本筋とは離れた段も少なくなく、また、二十三段のようにその段の中だけで大きな時間の流れ、それに伴う登場人物の成長が見られる箇所もある。そういう体裁をとるこの古典を、門外漢の気楽さで何度か通読していると、時の経過という観点から眺めてみたくなる段が目に付く。先に引いた、散ればこそ、の歌も、時間の遡行はかなわぬ、それゆえあるひとときが美しく輝くのだ、と読める。さらに一つ引く。

むかし、東の五条に大后の宮おはしましける、西の対に住む人有けり。それを本意にはあらで心ざし深かりける人、行きとぶらひけるを、正月の十日ばかりのほどに、ほかにかくれにけり。ありどころは聞けど、人の行き通ふべきところにもあらざりければ、猶憂しと思ひつゝなんありける。又の年の正月に、梅の花ざかりに、去年を恋ひて行きて、立ちてみ、ゐてみ見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思いでてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほの〴〵と明くるに、泣く〳〵帰りにけり。（四段）

突如恋を奪われた若い男の悲しみの心情を描いた美しい文章である。夜な夜な通っていた恋人の女性が、他所に移されてしまった。移った先は常人が出向けるような場所ではなかった――おそらくは入内――ので、この女性にまた会えるという機会は失われた。悲しみにくれた男は一年前を思い出し、かつて幸福なひとときをおくった場所へ出向き、感傷に身をまかすのだった。日本の四季は豊かだという。四季に恵まれているとは、思い出に季節感が常に伴うことでもある。桜が、梅が、あるいは菊が追憶の場面に現われる。過去を振り返れば、夏の熱さ、冬の寒さもまたよみがえってくる。女に去られたこの男の場合もしかり。悲しみにいたたまれなくなった男は、満開の梅を目の当たりにして一年前のわが身の幸せを回顧し、ついでその幸福がもはや再び現実にはなりえないことを、改めて悟るのであった。「立ちてみ、ゐてみ見れど、去年に似るべくもあらず」の一文は、男の心のうちばかりかその動作をも書き加えることで、あれこれやってみるものの去年とは違うという悲しい再認識を読み手に伝えるのに成功している。千年の時空をこえて、この男の悲嘆が伝わってくる仕上がりになっている。

春とはいっても現在ならば冬、夜明けは遅い。「夜のほの〴〵と明くるに」の一文は、いかに長時間この男が追憶に浸っていたかを語って余りある。そして、冬寒の夜半に思い出の場所へ出向き、明け方まで去年の追憶に身をまかすことができるのは、つまり寒さなど厭わず行動がとれるのは、若さの賜物に他ならないということにも気付く。だが、肝要なのは、やはり歌だろう。愛するあの女性が目の前から去った今では、月も春という季節も、同じようでいて同じではない、この自分のみ去年と変わらぬ気持で慕っているのだ、という一首。慕う気持に変わりはないけれど、見渡せば世の中は去年と似ているようでその実同じではない、という発見は、上の句が醸し出す畳みかけるようなリズムと相俟って、この男の孤独感、疎外感を一層強く読み手に感じさせるのである。

悲しみのあまり文字通りいても立ってもいられない、の思いで懐かしの地に足を運んで見たものの、結局は厳しい現実を再確認するだけに終わったこの男の心情は、過去に対峙するという点では、あのシルヴィのおばの対局に位置するものである。すなわち、菅野昭正の表現を借りるならば「取りかえしようもなく失われているのを承知の上で、なおかつ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

過去を取りかえそうと焦慮する」姿を、ここに見てとることができる。

和歌が奏でる「テクストの快楽」

『伊勢物語』が「歌物語」と呼ばれるゆえんを、秋山虔は「各章段の眼目は和歌がどう詠まれ、そのことがどういうことなのか、という一点において共通している」[11]点にあると最新の研究のなかで指摘する。権威の言ではあってもこれは言い古されたことの再確認の気味がないわけでもない。しかし、読み進むにつれ作品中の和歌の持つ力を改めて感じている市井の読者にとっては、みずからの読みを確認できる心強い一言となっている。

ここで、和歌の持つ力を味わいつつ「テクストの快楽」をも堪能できる、よく知られた一節を引こう。

むかし、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でてあそびけるを、大人になりにければ、おとこも女も、恥ぢかはしてありけれど、おとこはこの女をこそ得めと思ふ、女はこのおとこをと思ひつゝ、親のあはすれども、聞かでなんありける。さて、この隣のおとこのもとよりかくなん。

筒井つの井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振分髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき

などいひ〳〵て、つゐに本意のごとくあひにけり。（二三段）

井戸のまわりでわいわい遊ぶ幼い男の子と女の子、何とも可愛らしい一幅の絵になるような情景から話は始まる。幼なじみが思春期になって異性として相手を認識し始め、以前のように言葉を交わすようなことはなくなった。女の親は、娘を縁付かせようとする。しかし、幼なじみの二人は、内心、結婚するなら相手はあの人、と決めている。だが、言葉を交わさなければ、事態の進展は何もない。何も起らない。ここで、見事に機能して、行き詰まっていたこの現状を打開してくれたのが和歌だった。「君ならずして誰かあぐべき」とは、女の側からの広義のプロポーズと読める。まさに二人のこれからの人生を決めるほどの力を和歌は示したのである。そして、「つゐに本意のごとくあひにけり」の一文を目にすると、千年のちの読者もまた気がつけば安堵のため息をついている。

幼さが成長して若さへと転じるさまは、「井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな」の句が巧みに物語っている。背丈が伸びたとは、時間の経過を、そしてこの若者の視点から言えば、大人になった、幼さから脱皮して若さへと移行したことを意味する。この一節も、他の多くの段と同様青春を語っている。すなわち『伊勢物語』は、平安朝の青春を描いた文学でもある。この特徴は、本文校訂等の作業や成立史といった「学問」分野に没入する学者よりも、何よりも文学として接することを第一義とする文学者の目に留まるようだ。かつて佐藤春夫は『伊勢物語』との自らの邂逅を振り返りながら、こう書いた。

わたくしは上欄の評釈をたよりにひとり読み興じた。物語はわたくしのおぼつかない読書力でもよくわかつたし、そのころわたくしは歌をよみはじめてゐたので歌書のつもりで読みはじめたのだが「月やあらぬ春やむかしの春ならぬ」の歌のあたりまで来るとすつかり魅了さ

NII-Electronic Library Service

Meisei University

れた。伊勢物語は全く青春の書だからである……はじめて通読して後、わたくしはこれを歌書としてよりも青春の書として恋愛教科書と見るやうになつた。[12]

青春の書、という指摘には直ちに首肯したいものの、「恋愛教科書」というのには少々ひっかかる。もちろん、現代の恋愛に適応できるという意味ではなかろう。自分を慕ってくれはするが、こちらは好きでもない年配女性と一夜をともにする男の心遣いを讃える（六三段）姿勢は、さすがに現代ではたいした賛意は得られないだろう。平安朝の恋愛教科書というのならばまあよい。といっても、描かれている個々の恋愛は一つ一つが独自なものである。平安朝においても『伊勢物語』を手本に恋の一つでもしてみようというより、平安朝の恋愛の諸相を教えてくれるという意味での教本なのであろう。

青春、そしてそれに付きものの恋愛、その強烈な一例をも『伊勢物語』は載せる。

昔、若きおとこ、異しうはあらぬ女を思ひけり。さかしらする親ありて、思ひもぞつくとて、この女をほかへをひやらむとす。さこそいへ、まだをひやらず。人の子なれば、まだ心いきおひなかりければ、とゞむるいきおひなし。女も卑しければ、すまふ力なし。さる間に、思ひはいやまさりにまさる。にはかに親この女をおひうつ。おとこ、血の涙をながせども、とゞむるよしなし。率て出でて去ぬ。おとこ、泣く〳〵よめる。

出でていなば誰か別の難からんありしにまさる今日は悲しも

とよみて絶え入りにけり。親あはてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらじと思ふに、真実に絶え入りにければ、まどひて願たてけり。今日の入相許に絶え入りて、又の日の戌の時ばかりになんからうじていき出でたりける。昔の若人は、さるすける物思ひをなんしける。今の翁、まさにしなむや。（四〇段）

息子が召使いの女に恋をした。いつしかその恋は本物となった。二人の身分の違いを考え将来を案じた男の親は、結局この女を追放することとした。その事実を知ったこの若者は「血の涙をなが」したが、いまだ親から独立せぬ身ゆえ、如何ともしえなかった。そして悲しみのあまり気絶し、さらに息が止まった。幸いそののち蘇生したものの、「出でていなば誰か別の難からんありしにまさる今日は悲しも」の歌は、辞世の歌となるところであった。女が自らの意志で出ていったならば別れは難しくもない、だが無理やり引き離されたのだから、これまでにもまして今日は悲しくてたまらない、という心情そのものを直截詠んだ、凝った修辞などとは無縁の実に率直な一首である。息子の召使い女に対する恋心の深さを、男の親もうかがい知ることができるというものである。第三者の都合で引き裂かれるような悲恋の経験がある者はもちろんのこと、そうでない読み手も、血の涙を流し、気絶し、そして呼吸さえ止まったこの若者の「物思ひ」の強さに、ついつい引き込まれてしまうのである。

結語——永遠なる若さを求めて

青春を謳歌する文学とも言える『シルヴィ』も『伊勢物語』も、ともに「テクストの快楽」は味わわせてくれるものの、その実、諸行無常のモチーフが底流する作品であり人生の反遡行性・一過性を語っているに

NII-Electronic Library Service

Meisei University

過ぎないではないか、という見方も成立しよう。永遠の若さ、永遠なる美など、所詮現実には有り得ないのであって、『シルヴィ』のなかに登場するフェナンビュール座の妖精といった非現実の世界でのみ存在するものだと言う向きもあろう。皮相だけ眺めれば、確かにそう思えるかもしれない。だが、実際は違う。文学の中に、永遠の若さ、永遠の美は、いつも存在する。古えの書を紐解けば、たちまちにしてあの陽気なシルヴィが、そして平安朝の恋愛を織りなす若者たちが、目の前に姿を現す。人の世は諸行無常であろうと、人生は一度きりのものであろうと、作中の若者たちはいつの時代に読んでも若やぎ、潑剌とし、そして恋を楽しみまた恋に悩み、時には悲嘆にくれている。書物を通して永遠なる若さ、永遠なる美しさに接し、「テクストの快楽」を堪能することができるのは、文学を読む極上の楽しみの一つであろう。

註

(1) この拙き読書感想文を、平成十五年三月をもって定年の制度により本学の教育を離れられる大原千代子先生に献じる。本学で教鞭をとられること三十有余年の大原教授は、熱心な教育者であられるに加え、純文学をこよなく愛でる文学徒でもいらした。その語り口は、『クレーブの奥方』に描かれたフランスや英国のサロンを想起させる、豊かな教養を誰にでも感じさせる知的なものである。お話から多くを学ばせていただいた一人として、青梅の地で定期的にお目にかかれなくなるのは残念に思う。学恩に感謝しつつ同教授を送るに際し、浅学非才を顧みず、ここに狭義の専攻から離れて敢えて文学を主題とする一文を草することとした。諸賢のご寛恕を冀う。大原教授のご健勝を祈るに加え、自由なお時間が生まれた今、長年の文学研究の成果の一端を一書にまとめられることを、後進の身で僭越ながら、切に願いたい。

(2) 『ネルヴァル全集』(全三巻) 一九七五―七六年、『ネルヴァル全集』(全五巻) 一九九七―二〇〇一年、ともに筑摩書房刊。

(3) もっとも、ネルヴァル研究者の井村実名子によれば、同じ泡鳴の紹介文「仏蘭西の表象詩派」(明治四〇年) に、ネルヴァルの名が登場するのがおそらく初出だろうという。(「討議　ネルヴァルと日本文学」『カイエ　特集・ネルヴァル　幻視者の系譜』一九七九年二月号、一三〇頁)。

(4) 菅野昭正「回想のネルヴァル」(『カイエ　特集・ネルヴァル　幻視者の系譜』一九七九年二月号) 六五頁。

(5) Gérald Nerval, *Sylvie* in *Oeuvres I* (Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1960) p. 254.

(6) Ibid., p. 255.

(7) 菅野「回想のネルヴァル」六六頁。

(8) Ibid., pp. 255-6.

(9) 菅野「回想のネルヴァル」六五―六頁。

(10) 堀内秀晃、秋山虔校注『新　日本古典文学大系一七　竹取物語　伊勢物語』(岩波書店、一九九七年) 一五八頁。以下、『伊勢物語』の引用は、本書による。該当の段数を引用末尾に付すこととする。

(11) 秋山虔「伊勢物語の世界形成」(『新　日本古典文学大系一七　竹取物語　伊勢物語』) 三五九頁。

(12) 佐藤春夫「わが生涯の愛読書『伊勢物語』」(「日本古典文学大系　月報6」岩波書店、一九五七年) 一―二頁。

NII-Electronic Library Service